

COLUMN

鎌倉の猫事情

前回までのお話

16年の間、ミルクホールの愛猫として生きた生粋の日本猫三毛猫のシュガーがその長寿をまっとうし、老衰の為亡くなった1年後、我が家に、新しい飼い猫として選ばれてきたのが、シャム猫の血を強く受け継ぐグーニーだった。負けず嫌いで乱暴者のグーニーがミルクホールのスタッフをてこずらせながら成長する中、ある人から、グーニーの許婚だと言って1匹の愛らしい子猫を託された。2匹が出会ったその日からグーニーのスタッフ達への乱暴もおさまり、2匹仲良く暮らす日々が続いていた。幼い猫夫婦は子室にも恵まれ、新しい家族と幸せに暮らしていたが、その猫一家を暗い目でじっと見つめる不吉な黒い影があった。その黒い影の正体は、ここ数年ボス猫不在となったこの裏路地に、いつの間にかどこからかともなく現われ住みついていた大きな灰色の猫だった。ある晴れた朝、グーニーと灰色猫は花咲く裏の小道で正面からにらみ合う事となり、ついに闘いの火蓋が切って落とされたのである。

鎌倉の猫事情 第三十三話



空が高く晴れ渡ったある秋の日の朝、静寂は破られました。2匹の間に張り詰めていた緊張の糸が音をたてて切れ、かろうじて保たれていたバランスは大きく崩れ、運命の歯車が廻り始めたのです。

互いに一定の距離を保ちながら、鼻に皺を寄せ、低い声で唸り声を上げながら、じりじりとその距離を縮めていく。互いのどんな隙をも見逃さない構えです。しかし、長期間の冷戦を経た2匹は唸りあうのにそれほど時間を掛ける事はしませんでした。

息を潜めて物陰から見守るミルクホールのスタッフたちの目の前で、2匹は強くジャンプし、どちらからともなく飛び掛かり、悲鳴に似た鳴き声とともに、2匹はもつれあって消えていきました。まだ遠いところで彼らの声が聞こえています。

最初の闘いは、結果を見るまでもありません。グーニーより体も顔も二廻りは大きく見える灰色猫です。そのすわった面構えからは、数々の闘いを乗り越えてきた、放浪猫の底知れない自信と経験が、かいま見えています。まだ、早い…グーニーは、スイーピーと夫婦になり、すでに7匹の子を持った親猫ではありませんけど、まだ若干1才と半年ばかり。灰色猫の目から見れば青二才であるばかりでなく、苦勞知らずの甘ったれな家猫なのです。

予想通りの結果…夜になって、グーニーは人知れずに帰宅していました。そして一匹静かに自分の餌場に座り込み、水を飲んでいるのです。『グーニー?』声をかけると、グーニーはゆっくり振り返りました。左の額に赤く黒ずんだ傷跡。思ったよりは傷の浅いその顔には、あきらかに落胆の色が浮かんでいます。水を飲み終わると、その場にそのまましばらくの間しゃがみ込んでいました。

そして、もう一度見に行ってみると、そこにもうグーニーの姿はありませんでした。

しばらくすると、また暗闇から、2匹の猫の唸り声が響き渡っているのが聞こえます。

こうして、グーニー生まれて初めての試練の日々、男と男の闘い、魂と魂のぶつかり合う日々が始まったのです。

to be continued



CELL

本当に海の底にいるみたいだった。

最初はただ窓をたたきつける雨のしずくを眺めていただけだった。雨のしずくはいつか窓を被う水のペールとなって、流れつづけていた。ただそれを眺めていただけだった。

そのうち部屋は水のペールにすっかり被われていった。水のペールに包まれた部屋は、とても温かくて、そして何より安全に思えた。何の危険もないし、何も侵入してくることはないと思った。特にこの部屋に閉じこもってしまおうと思っていたわけではなかったのに、いつの間にかこの窓ガラスから外へは出られなくなっていった。

このガラス窓は、この部屋の眼球のようだ。光をとおして部屋の中の僕に色んなものを見せてくれる。窓ガラスを通してみると、朝の光も夜の星の光も、キラキラと長い尻尾を引いているみたいで、不思議な感じがした。

ある日、外でなんだか物音がして、見てみると、隣のビルが工事を始めていた。

そして、沢山の人が1日がかりでビルに青い大きなシートをかけた。

その日から、部屋は本当に海の底に沈んだみたいになった。

僕は毎日海の底で眠り、海の底で目を覚ました。

目を覚ますとガラス窓の向うに、人魚がゆっくりと泳いで通り過ぎていくのが見えた。

僕はガラス窓をすり抜け、海の底を泳ぎ廻り人魚を追いかけるのを夢見ている。

…僕は、最初からこんな風に部屋にこもってしまおうと思っていたわけじゃなかった。

今だって、いつかは、ちゃんと歩いて外へ出て行こうと思ってるんだから…

